

新しい近森リハビリテーション病院

近森リハビリテーション病院
リハビリテーション科 部長 和田 恵美子



より快適に

障害をもった患者さんが、より快適に適切なリハビリテーションを受けることができる環境を目指し、また、働くスタッフの環境にも配慮した病院を考え、みんなで3年にわたり検討を重ねた新しいリハビリテーション病院がついに完成しました。

全国屈指の広さ

新病院は延床面積 16,000㎡、180床の回復期リハビリテーション病棟としては、全国でも屈指の広さを有し、充実した設備を備えています。

歩行アシストロボットなどの導入

1,030㎡ある2階のリハビリテーション室には、患者さんが早期より安全に歩行練習ができる「免荷式天井吊り下げリフト」、歩行を3次元的に分析し、訓練や装具の効果判定を行う「3次元トレッドミル歩行分析」、またトヨタ自動車のリハビリテーション用パートナーロボットの臨床での研究に参加し、「歩行練習アシスト」を新規導入しています。

精密な嚥下内視鏡検査が

CTの他にはテレビX線を導入し、電子スコープも導入したことでより精密な嚥下内視鏡検査が嚥下造影検査と同時にできるシステムが構築できました。いままでは昔の基準に合わせていた嚥下食も、日本摂食嚥下リハビリテーション学会の「嚥下調整食分類2013」に準じた5段階の嚥下食に変更し、摂食嚥下障害の治療により積極的に取り組んでいきます。

10年後を見据え

他県から内覧会にお越しいただいたリハビリテーション科の先生方にも、10年後も見据えた先進的なリハビリテーション病院が完成したという、お言葉をいただきました。今度のリハビリテーションのニーズに対応していけるように鋭意努力をしていきたいと思えます。

わだ えみこ

リハビリテーション用パートナーロボットの臨床での研究に参加

トヨタ自動車の歩行練習アシストを導入

歩行練習アシストの特徴

- ・ 下肢麻痺で歩行が不自由な方が自然な歩行を習得できるよう、リハビリテーション初期段階から支援。
- ・ 麻痺した脚に装着することにより、脚を前方に振り出す動作や、膝を伸ばして体重を支える動作をアシスト。



▲各病棟にある談話スペースも兼ねた食堂



▲内覧会を開催



▲病室（個室）

免荷式天井吊り下げリフト

天井のレールからリフトで吊りあげることによって、軽い力で歩行することができます。両足の麻痺があり、なかなか足が振り出せなかった方や、膝の痛みがあり体重をかけづらかった方、また体幹の筋力も低下し、平行棒内での歩行が重介助だった方が安心して歩行練習が可能となりました。足の振り出しが軽くできるようになった、安心して歩けるようになったなど嬉しい言葉を聞くことができます。



3次元トレッドミル歩行分析



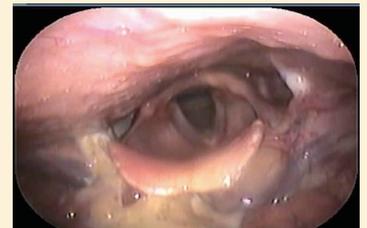
トレッドミルで歩行練習をすることで、平行棒内ですらと歩く感覚をつかんだときにターンをすることがなくなり、歩行練習を有効に行えるようになります。またマーカーをつけて、動画を撮影、スティックピクチャーにしたり、数値化することもできるようになりました。歩行を客観的に評価でき、グラフで視覚的にみえるようになることで実際の訓練や、作成した装具の効果判定が可能になります。より適切な訓練を提供できるようになります。

嚥下内視鏡検査と嚥下造影検査

今までのファイバースコープではわかりにくかった唾液の誤嚥も電子スコープの鮮明な画像ではっきりわかるようになりました。またスコープは細くやわらかくなったことで検査時の苦痛も少なくなりました。嚥下造影と同時に行うことで、より質の高い嚥下評価ができるようになりました。



▼造影写真



よりおいしく安全な嚥下食

近年は細かく刻んだ食事は逆に誤嚥を増加させるというふうにいわれています。やわらかい、食べやすい、おいしい嚥下食を目指し、ムース食とやわらかい移行食を全面改訂しました。

実際に自宅での食事に移行しやすいように危険な刻み食でなく、ペースト食や粒ペースト食も導入しました。真空調理など新しい機材も栄養科に導入しましたのでよりおいしい、安全な食事を目指していきたいと思っております。



▲新たに導入した真空調理機



▲食べやすくおいしいムース食



▼やわらかい移行食

献血キャンペーン

ありがとうございました。

9月9日水曜日に献血キャンペーンを開催しました。職員に加え、一般の方もご参加いただき89名の方にご協力いただきました。

みなさま、ほんとうにありがとうございました。次回は2月に開催を予定しておりますので、よろしくお願いたします。

「患者家族と共に」を 目指しています

近森病院 SCU 看護師長 永野 智恵



SCU (stroke care unit) は、脳卒中(脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血) 専門の急性期治療と看護、リハビリを中心

とした病棟です。

現在、病床数は15床で稼働しており、患者3名に対して看護師1名が配置されています。

脳卒中の看護として、治療、診療の補助は基より、看護としてのリハビリを重要な意義とし、脳卒中発症により意識障害や麻痺を有した方が、少しでも日常生活を自立して行えるように、また元の生活に近い状態になれるように多職種と情報共有し、発症早期から

状態に合わせた日常生活の援助を行っています。

当病棟では平日の朝、多職種(看護師、PT、OT、ST、管理栄養士、薬剤師、ソーシャルワーカー)が、患者さんのベッドサイドで患者さんの状態やADL(日常生活動作)の確認、方向性などを話し合い、情報共有することで統一したケアへ結びつくことを目的とした、カンファレンスを行っています。

そのなかで患者家族の思いや不安、今後の方向性について聞き取りが出来れば、更に患者に寄り添ったケアや支援ができるのではないかと考え、今年8月より家族の方へカンファレンスへの参加を呼び掛けています。

患者家族にカンファレンスへ参加していただくことで、より一層入院早期から退院後の生活に向けてサポートできる病棟を目指しています。

ながの ちえ

「PS通信」 4

大改造!! 劇的ビフォーアフター ～近森の匠～

「現場により良い改善を」、名付けて「大改造!! 劇的ビフォーアフター～近森の匠～」について、紹介させていただきます!

テレビでお馴染みのネーミングですが、番組同様に患者さんや来院者はもちろんのこと、スタッフにとっても近森会グループが過ごしやすく、優しい環境になるよう、改善を試みていきたいと思いを企画しました。

目に見えるハード面だけでなく、見本にしたいスタッフについてもひろっぴ等を通じて発信していきたいと思えます。

また、皆さんの声を聴くため、PSサポーターが随時色々な部署に伺う予定です。自部署で気になる点などありましたら、どうぞお気軽に声をおかけください。

皆と一緒に近森会グループをより良くしていきましょう。「近森の匠」は皆さんです!!



※タイトル名の使用許可はTV局にいただいています。

地域医療連携今昔



近森 正幸

20年近く前の平成8年4月、旧6病棟の小さな部屋で矢野婦長が一人で始めてくれた「病床管理室」が、近森病院の地域医療連携の最初であった。

平成10年には「地域医療連携室」に変更されたが、整形外科の衣笠統括部長から「あまりに忙しいので何とかしてほしい」と要望があり、平成11年10月に落ち着いた外来患者さんを、地域のかかりつけの先生方をお願いする逆紹介を始めたのが地域医療連携の真の始まりだったといえる。

近森病院に患者さんを取り込まないという病院の一大方針転換を行っ

て、地域のかかりつけの先生方に安心して患者さんを紹介していただけるようになり、次第に紹介患者さんが増えてきた。

平成15年2月には地域医療支援病院の認可をいただき、平成23年11月には外来センターが完成、完全紹介・予約外来制となり、初診の紹介患者さんも「地域医療連携センター」に予約して来られるようになった。その後、予約せずに来られるフリーの紹介患者さんは急速に減ってきたが、今年になってフリーの紹介患者さんのほとんどが緊急度の高い、救急車で搬送されてくる入院患者さんになった。

外来センターのシステム化によってパブリックな連携の完成度が高まってきている。これはこの16年間、職員みんなが営々と努力してきたおかげであり、浜重副院長を始めとした先生方が、逆紹介した患者さんを専門医として年に2、3回、きちんとフォローアップしてくださっていることが大きく貢献している。そしてなによりも、地域医療連携を進めることで県民、市民が近森病院を信頼してくださったことが、もっとも大きなことである。

理事長・ちかもり まさゆき

● 第3回看護部 ●
オープンホスピタル

日時：11月7日(土)
13:30～16:00

対象者：看護学生および保護者
有資格者(看護師)



特別篇 歳時記

アオノリュウゼツラン

近森リハビリテーション病院医療相談室
ソーシャルワーカー 村上 佳代

熱帯～亜熱帯の各地に広く野生。メキシコ原産でテキーラというお酒を造るのに使われています。一般に成長は遅く、花を咲かせるまでに数十年を要するとい



ます。あまりの成長の遅さに、century plant(世紀の植物)という別名があるほど。そんな神秘の花が今年、高知県黒潮町で咲きました。花茎はなんと8メートル! 鉄塔と見間違う迫力でした。 むらかみ かよ

写真・筆者



● 医療今昔物語 ● 整形外科 5

膝の靭帯再建術について

近森病院整形外科
統括部長 衣笠 清人



関節鏡を用いて行う手術を総称して鏡視下手術と言います。先月の鏡視下手根管開放術もそのひとつですが、最も早くから行われ、しかも最も広く普及しているのが、膝の前十字靭帯再建術(ACLR)です。膝の前十字靭帯(ACL)はスポーツ選手にとって非常に重要な靭帯で、その断裂は選手生命にかかわるものですが、意外なほどあっけなく切れてしまいます。だから私たち整形外科医はスポーツ選手が膝のけがで来院したら、まずこれを疑います。

ACLが断裂すると前方動揺性というものが出現し、膝が不安定になります。だから治療の目的は膝の安定化です。昔は直視下での靭帯修復術も行われましたが、成績が悪かったためにいろいろな方法の靭帯再建術が考え出されました。しかし直視下で、すなわち膝関節を大きく開けると術後の関節拘縮が常に問題になります。そこで1980年

代以降鏡視下 ACLR がさかんに行われるようになりました。

現在は再建靭帯の材料としては膝蓋腱や半腱様筋が主として用いられており、はじめは単一の靭帯再建術が行われていました。しかし ACL はその線維が二方向に分かれていることから、より生理的な再建をめざして最近では再建靭帯を二本作成して用いる二重再建術も始められています。

近森病院整形外科でも5年前から上田英輝部長が中心になってこの新しい方法で行っています。この手術法のおかげで以前は致命的外傷であった ACL 損傷も、現在では1年程度の術後リハビリ期間が必須ではありますが、プロフェッショナルレベルでも必ず競技復帰できる外傷となりました。素晴らしい進歩と言えますね。

きぬがさ きよと

近森看護学校通信 5

防災訓練開催報告

9月9日(水)に授業の一環として防災訓練を実施しました。「医療機関に勤務する職員が知っておきたい消防知識と技術について」の講義と、エアーストレッチャーや布団を使っての担送患者避難、車椅子での階段避難方法を学生全員が体験しました。「天災は忘れたころにやってくる」は寺田寅彦の警句ですが、日々の備えが大事です。(和田廣政)



近森会 保育室 そると あしながおじさんからたくさんの絵本が贈られました。



感染管理認定看護師の資格を取得

学ぶことの
大切さを知って……

近森病院感染制御部
感染管理専従看護師 主任 佐々木 美樹



平成26年9月から6カ月間、日本看護協会神戸研修センターでの研修を受け、今年7月に感染管理認定看護師の資格を取得しました。

これまでリンクナース・ICTのメンバーとして感染管理の実践現場で働き、日常の感染予防と感染制御活動を行ってきましたが、データの収集と活

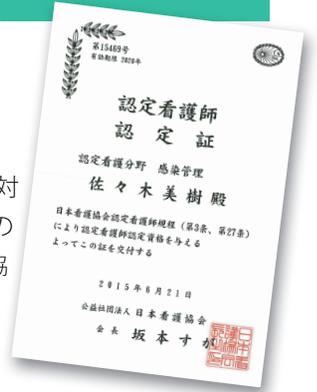
用や、疫学的視点での現場へのフィードバックの仕方、指導方法など基礎的知識が未熟であると感じていました。

また近森CNIC（感染管理認定看護師）から研修で学んだ数多くの話を聞かなかで、自身も高いレベルで感染管理が実践できるようになりたいと志し

ました。感染対策は、職員の方のご協力があったからこそ力を発揮します。

現在は専従看護師として日々勉強の毎日ですが、これからも初心を忘れず地味に地道に頑張っていきますので、皆さんよろしくお願ひ致します。

ささき みき



日本カプセル内視鏡学会 読影支援技師の資格を取得

読影支援技師って？

近森病院臨床検査部
臨床検査技師 永井 多恵子
徳弘 将光



画像で最終診断を行います。最初に技師が一次読影することで、医師の負担を大幅に軽減することができ、また医師と技師の二重読影で診断能の向上を図ることが可能となります。

小腸カプセル内視鏡読影支援技師は、平成25年度にスタートしたばかりの新しい資格で、現在全国に276名の技師が誕生しています。四国では、私達が初めての読影支援技師となりました。まだまだ未熟ではありますが、どうぞよろしくお願ひ致します。

ながい たえこ / とくひろ まさみつ

読影支援技師という言葉、ご存知ですか？

今回は、カプセル内視鏡読影支援技師についてご紹介します。

小腸カプセル内視鏡検査は、カプセルを飲み込むだけで小腸の撮影ができる検査です。約6～7mの長さの

小腸を、カプセルが1秒間に2～6枚ずつ撮影し1回8時間の検査で、なんと55,000～60,000枚もの画像を撮影します。

この画像を医師が全て見るのはとても大変です。そこで、登場するのが読影支援技師です。まず始めに、技師が画像を1枚1枚解析して必要な画像を選びます。その後、医師が選択した

リレー エッセイ

お米

医事課 主任 市川 久江



8月15日に室戸市元崎山で稲刈りをしました。田んぼは四国の26番である西寺（金剛頂寺）の近くで、高知より少し涼しかったです。良く晴れていて、稲のすぐ上を赤とんぼが大群で飛び、数羽のツバメが間に入り込んでいました。稲を刈っているとコムシやカエルが無数に逃げ回り、田んぼのまん中辺りにマムシが一匹いて驚きました。私は「ハメ」といいましたが、室戸では「ハミ」というみたいです。高知の西と東でいい方が違うみたいです。

つい全力で頑張ってしまう私は、今回微力でした。翌朝、新米の香りを感じ美味しくいただき、春の田植えや草取りな

ど数々の手間に感謝しました。お米が美味しい理由の一つには、ジオパークと同じように大昔の地殻変動で海の恵みが大地に及ぼして、土にミネラルが有るのではと勝手に思っています。

作った人へのお礼も込めて、一粒残らずおいしく食べていきます。自己流ですが、ご飯は炊き立てが好きで水は水素水を使っています。①さっと1回洗い流し②そのままお米を数回混ぜ③水で洗い流します（とぎ汁は花などの鉢に分けます）④早炊きでスイッチオン。炊きたては卵かけごはんが美味しいですが、おむすびも最高です。熱々のご飯とお塩で米粒を潰さないように、優しく、心をこめて握るのです。誰がやっても美味しいですね。あ、とぎ汁は栄養が有るのか花などが良



く育ちます。下水道を利用していない方はぜひとぎ汁は植物へ。とぎ汁が一番川を汚すみたいです。

いちかわ ひさえ



講師：コロンビア大学病院
心臓外科 中好文先生

コロンビア大学病院心臓血管外科の中好文氏は、クリントン元大統領の冠動脈バイパス術で第一助手を務められた方です。過去に当院からも何回か見学させていただいています。

この25年間で米国の医療は大きく変わり、とくに治療成績の公表などが

進んできたとのことでした。トレーニングも厳しくまた期間も長い心臓外科は一時期嫌われて希望者が減っていましたが、再びまた増えてきているとのことでした。とくに良いプログラムを持っているコロンビア大学では競争率が約50倍とかなり高率になっている

とのことでした。

講演前に当院で冠動脈バイパス術ならびに大動脈修復術をしていただきました。もちろん患者さんは元気に退院されました。

いりえ ひろゆき



近森病院心臓血管外科
部長 入江博之

ザ・RINSHO 29 薬剤部 3



がん領域における 薬剤師の役割

薬剤部 宮崎 俊明

「髪の毛が抜ける」、「食欲が落ちる」、「普段の生活が大きく変わる」—抗がん剤と聞くと、こんなイメージを思い浮かべられる方もおられるのではないのでしょうか。以前にはこのような状

態になる抗がん剤治療も多く見られましたが、最近では一部の治療法を除き、ふだんと変わらない生活を送りながら、抗がん剤の治療を

▼点滴センターに薬剤部の分室（サテライト）を併設



続けられるようになってきました。

吐き気止めに代表される副作用を軽くするお薬が進歩し、支持療法と呼ばれる分野が確立されてきたためです。私たち薬剤師は、抗がん剤の投与量を厳重に確認し、正確に調製することはもちろんのこと、患者さんの状態を確認して支持療法に用いるお薬を、医師へ提案することが大きな役割となっています。

当院では患者さんが治療を受ける点滴センターというスペースに薬剤部の分室（サテライト）が併設されています。ここに薬剤師が常駐することで、すぐに患者さんのもとに伺うことができ、薬剤についての説明や体調変化などについて話を聞くことが可能になり、他職種との速やかな連携が図れています。

これからもより患者さんに身近な薬剤師として安心・安全な抗がん剤治療を提供できるように業務を行ってまいります。

みやざき としあき

ハッスル研修医 熊本と高知、新しい縁に



初期研修医 古後 斗斗

訊かれることが多いので、まず名前について書かせてください。苗字が「こご」で、名前が「とご」です。名前の由来は、母音をすべてあいうえおの「お」の音で揃えたかったからだそうです。だいたい「こごとご」とまとめて呼ばれることが多いです。日本人で、熊本出身です。

熊本と高知には、お酒を好きな県民が多いという共通点があります。

そのためか美味しいお酒が多く、そのなかに「干城（たてき）」というお酒が高知県にあります。谷干城という窪川出身の実在した人物からつけられたそうです。

彼は西南戦争に参戦し、政府軍司令官として熊本城で西郷隆盛率いる薩摩軍人の軍勢を迎え討った。この戦争を以って熊本城は不落の名城として名を知られるようになります。

物知りなように書きましたが、全て近森病院の先生に教えてもらっていました。まったく縁もなく来たと思っていましたが、実はあり、新しい縁が出来ていくことを嬉しく思っており、日々の研修をハッスルしています。

こご とご

【第一部】「近森病院 総合心療センターにおける
急性期医療から在宅への実践」

近森病院院長 近森 正幸

【第二部】「地域包括ケアシステムの構築に向けて
～精神障害者の地域移行の視点から～」

厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課
課長補佐 鶴田 真也氏

第一部は、近森院長より精神病床の機能分化と連携について話がありました。実践として取り組んだ精神病床の急性期病床への特化と一般病床44床の削減により急性期精神科医療の質的向上や疾病構造の変化(統合失調症の減少と感情障害やパーソナリティ障害の増加)、一般診療科との間で橋渡しをするリエゾンナースの活躍、精神障害者の社会復帰や就労支援など幅広く報告がありました。



第二部は、鶴田課長補佐より機能分化を進めるための施策として、退院後の地域生活支援を強化するためのアウ

トリーチ(訪問支援)や外来医療など入院外医療の充実の必要性が述べられ、医療、介護、予防、住まい、生活支援が包括的に確保されることが重要との認識を示されました。



一方で、高齢化の進展状況には大きな地域差があり、地域包括ケアシステムを機能させるためには、市町村や都道府県が地域の自主性や主体性に基づき、その地域の特性に応じて作り上げていくことが大切とも話され、実現のための眼目は、「顔の見える関係づくり」、「その場のセッティング」というものでした。

当日は高知県以外からも3病院の参加など140名を超える参加をいただき盛況のうちに閉会することができました。

診療支援部
部長 山崎 啓嗣
やまさき ひろつぐ



近森卒業生のいま

平成17年度初期研修医3

過去と現在



▲ドクターヘリで

▲当直中迎えた36歳の誕生日を祝っていただきました!

近森病院脳神経外科

科長 西本 陽央

初期研修終了後、脳神経外科医として当院で勤務を続けています。初期研修の2年間は、それまで18年間続いた学校教育から卒業し、社会人になり、同時に医師になり、新たな友人ができ、夢中で働いて初めての給料をもらい、大川筋から廿代町へ夜の遠征を繰り返し、また一生懸命働いて、たくさんの患者さんが笑顔で退院し、やりきれない死と大往生があり、怒られたり、桃をもらったり、街で会って手を振ったり、日替わりランチを頼んだ瞬間に緊急手術で呼び出されたり、でも帰りには見事な月に息を吞んで、そのまま息だけでなく一杯飲んで、翌朝寝坊したりしながら過ごした2年間でした。

よく考えてみると、今もそう変わりない生活をしています(さすがにもう寝坊はしません)。

にしもと よう

ワイン講座 ● 36

ぶどう品種を知り、個性を探る
白ぶどう その13

イタリア篇 アルネイス

アルネイスという品種は、古くからあるイタリアのピエモンテ州の土着品種です。国際的に知られた品種とその味わい、他の多くの素晴らしい白ワイン品種とは個性が異なり、また、栽培が難しかったこともあり、長い間あまり栽培されずにいました。

変わったその名もこの地に根付く起源を表していて、アルネイスとは気難しい

ロエロ・アルネイス・ブリッコ・デッラ・チリエージェ/ジョヴァンニ・アルモンド/イタリアピエモンテ州●ピエモンテの最高の白ワインのひとつ。程よい果実味、心地よい酸味を持ち塩味に似たミネラル感が豊かな味わい。

人のことを指す土地の方言に由来しています。

アルネイスの聖地といわれるロエロ地区は、ピエモンテの中心アルバの町の西隣にある比較的小さな生産地で、現在では技術の進歩やワイン生産が復活し、2004年にはイタリアワインの最高格付けD.O.C.G.にも認定され、今やピエモンテを代表する白ワインとまでいわれ深く根付いています。

口当たりは優しくコクがありながら、高めの酸があるため軽やかで引き締まった印象で、余韻には果実味の中に、わずかながらフレッシュな苦みがあるのが特徴的です。前菜や魚介系のお料理、クリーム系の Pasta などと好相性な白ワインです。鬼田知明(有限会社鬼田酒店代表)



私の趣味

ボルダリング

近森病院臨床栄養部

科長 佐藤 亮介



▲インドア・クライミングジム「ストーンラプ」で

皆さん、目の前の立ちはだかる壁に張り付き、縦横無尽に駆け登りたい、と思ったことはありませんか。そうです！ スパイダーマンのように……。私が今、夢中になっていることは「ボルダリング」です。ボルダリングとは高さ3～4m程度の出っ張りのある壁を、ロープを使わずに登るフリークライミングのひとつのジャンルです。

インドアのボルダリングジムは全国で250件以上あるといわれており、高知市にももちろんあります。シューズとチョーク（手の滑り止め）を用意すれば子供から大人まで性別年齢を問わず楽しめるスポーツです。

必要以上の運動神経や筋肉はいりません。ボルダリングに必要なものは自由な発想力です。チカラまかせで壁を登るのでなく、バランス感覚や柔軟性が重要とされます。どのルートで壁を登って行くのかを考えることが大切な、頭脳系のスポーツです。スイスイと課題をクリアしていく子供たちや、か細い女性を横目に、届きそうで、届かない、ゴールを見上げ、「ああ…、手首から糸が出たらな…」なんて不埒なことを時々考えながら、日ごと、屈強な壁に挑む小生でございます。皆さんも一度お試しあれ！！

さとう りょうすけ

乞！熱烈応援

自身の成長で、皆さんのサポートを コミュニケーション

近森リハビリテーション病院 6階病棟西
看護師長 和田 絵美

この度、近森リハビリテーション病院は、新病院となり移設しました。患者さんにはリハビリテーションに最適な、スタッフには仕事のし易い環境が整いました。

これからは、患者さんやスタッフの皆さんが集中してリハビリテーションや業務に取り組めるためのサポートが出来るように、一日も早く私自身が成長していきたいと思えます。

わだ えみ

初心を忘れずに

近森リハビリテーション病院 3階病棟西
看護師 主任 川村 加恵

主任の業務を行うようになって、いちばん変化したのは、気持ちだと思います。

みんなが笑顔で仕事の出来る病棟にしたい。そのためになにが出来るのか、日々真剣に考え、取り組むようになりました。

慣れないことも多く、戸惑いながらですが、初心を忘れずに頑張りたいです。よろしく願います。

かわむら かえ

近森リハビリテーション病院 6階病棟東
看護師 主任 畠中 麻衣

私が主任として大切にしたいことは、一生懸命に仕事に向き合う姿勢とコミュニケーションです。

まずは相手の考えを聞いて受け止めて、自分の考えを伝えることでスタッフと一緒に考えることができると思えます。

自分の考えをしっかりとるよう、知識や技術を身につけていき、どこまでできるか分かりませんが、一生懸命頑張りたいと思えます。

はたけなか まい

寄り添う看護を忘れず

近森リハビリテーション病院 5階病棟東
看護師 主任 田所 真由美

近森リハビリテーション病院で働き始めて5年目を迎えました。

回復期での看護の視点もまだまだ未熟であり、日々多職種と関わりながらリハビリ看護に取り組んでいます。

今回、主任の辞令をいただき、不安ではありますが、いつも大切にしている患者さんの気持ちに寄り添う看護を忘れず、頑張っていきたいと思っています。

たどころ まゆみ

乞！熱烈応援

和を大切に…



近森病院北館 4 階病棟
看護師 主任 森田 祐貴子

9月1日付けで主任心得の辞令をいただきました。

近森病院に就職して4年、それを機に十数年ぶりに新人(?)生活を送り、初心に帰れたことはとても貴重な経験となりました。また、スタッフにも恵まれ、いまの私があると感謝しています。

まだまだ未熟ですが、ご指導いただきながら日々精進してまいりますので、よろしく願いいたします。

もりた ゆきこ

思いやりをもって



近森病院薬剤部
主任 安村 伸枝

今回このようなお話をいただき日々の業務を振り返ってみると、同僚や周りのスタッフの方に助けてもらう機会が本当にたくさんあると、改めて感じました。

薬剤部は慌ただしい毎日を送っていますが、そんな今だからこそ声を掛けあい、周りを見て、聞く耳を持ち、思いやりの気持ちを忘れずに業務に励んでいければと思います。

やすむら のぶえ

周囲の人たちの支えに



近森リハビリテーション病院言語療法科
科長補佐 横畠 史佳

就職して10年、さまざまな環境で働く機会をいただき、多くの人々に支えられながら、ここまでやってこれたと強く感じます。

年数を重ねるごとに求められることも増え、私にできるのかと迷い、悩むことも多いですが、これまでの恩返しのため、患者さんやご家族はもちろん、周囲の人たちの支えになっていけるよう努力していきたいと思っています。

よこばたけ ふみか

初心、笑顔を忘れずに



近森リハビリテーション病院理学療法科
主任 瀨吉 佐和子

周りの先輩や同期などたくさんの人に支えられ、就職後瞬く間に13年が過ぎました。

今回、不安に思いながらも辞令のお話をいただきました。リハビリ病院も新しくなり、新たな環境となりました。

これからも初心、笑顔を忘れずに、微力ながら支えになれるよう、頑張りたいと思っています。よろしく願いします。

はまよし さわこ

初心と笑顔を忘れずに



近森病院理学療法科
主任 山本 佳代

「今まで以上にしっかりしないと！」という身の引き締まる思いと「はたして私に務まるのだろうか」という少し不安な気持ちと、その責任の重大さを感じているところです。まだ成長過程ですが、ここまで仕事を頑張ってきたのは大勢の周囲の協力があってからこそです。

まだまだ未熟ですが「何ができるか」私らしく、私なりに力の限りを尽くす決意です。

やまもと かよ

変わり、変わらず



近森病院理学療法科
主任 瀨口 早千子

近森会10周年同期会にて「昔と今」を語り合った矢先、主任辞令の話を頂きました。

これまで先輩方に支えてもらいながら続けてこれられました。まだまだ力量不足ですが、私もその役割を担えたらと思います。

この10年で病院は大きく変わりましたが、良い意味で「今までと変わらず」、皆で協力し信頼されるチームを目指したいと思います。

はまぐち さちこ

2015年8月の診療数 システム管理室

近森会グループ

外来患者数	18,112 人
新入院患者数	922 人
退院患者数	907 人

近森病院（急性期）

平均在院日数	15.45 日
地域医療支援病院紹介率	60.62 %
地域医療支援病院逆紹介率	117.49 %
救急車搬入件数	569 件
うち入院件数	285 件
手術件数	446 件
うち手術室実施	306 件
うち全身麻酔件数	181 件

● 2015年8月 県外出張件数 ●
件数 36 件 延べ人数 55 人

図書室便り (2015年8月受入分)

- マイナーエマーゼンシー原著第3版 / Philip Buttaravoli (著)、大滝純司 (監訳)
- Primary - care trauma life support 元気になる外傷ケア / 箕輪良行 (他編)
- 臨床・病理原発性肝癌取扱い規約第6版 / 日本肝癌研究会 (編)
- CUMITECH 血液培養検査ガイドライン / Ellen Jo Baron (他著)、松本哲哉 (他訳)
- 良い戦略、悪い戦略 / リチャード・P・ルメルト (著)、村井章子 (訳)
- 医療六法平成27年版 / 中央法規出版 (編)
- 第六次改正医療法の解説 2025年に向けた医療提供体制の改革の全体像 / 中央法規出版 (編)
- 生きる 老いを生き、病いも生きて、死

編集室通信

長〜い夏休みが終わったと思ったら、シルバーウィークで5連休。休みが来るたびに、子どもは、「今度はどこに行く？」とワクワク、ソワソワ。おかげで楽しい思い出はどんどん増えていきますが、財布の中身は減る一方(汗)。それでも、喜ぶ子どもの笑顔に負け、またどこかに連れて行こうと思ってしまいました(笑)。 充

をも生きる / 岡田玲一郎、上田真弓 (共著)

《別冊・増刊号》

- 別冊・医学のあゆみ腸内細菌と疾患 / 中島淳 (編)
- 別冊・医学のあゆみレドックス Update ストレス制御の臨床医学・健康科学 / 生田宏一 (他編)
- 臨床栄養別冊 JCN セレクト 10 高齢者栄養ケア UPDATE 介護予防から終末期まで栄養ケアの現在がわかる / 吉田貞夫 (編)
- BRAIN NURSING 2015年夏季増刊 脳神経外科看護力ミラクルUPドリル / 久保道也 (監)
- 臨床心理学 増刊第7号 カウンセリングテクニック入門 プロカウンセラーの技法 30 / 岩壁茂 (編)

周りの支えに 感謝しつつ

帰郷も、地元での就職も果たせた！

40歳を過ぎ、そろそろ生まれ故郷の高知へ帰りたいと思い始め、近森会の求人情報に出会い、帰郷も地元での就職も果たせた。当面の目標達成で、これは大きな出来事になった。

「自立」して、なにもかも自分でやろうとする暮らしは、何ものにも代え難い倅せをしみじみ感じさせる毎日でもある。だが、43年のこれまでの人生を振り返れば、やはり、何よりも大きな出来事は、17歳高校三年の夏休みに入る直前、バイクで事故に遭い、車イス生活が始まったことだった。

大きな転機は関西への引っ越し

周りの友人たちは、「きっとまた歩けるようになる」と慰めをいってくれるが、医師から車イス生活になることを「宣告」された身には、その慰めが苦しかった。

そんなこともあって、リハビリテーション治療を受けていた病院で紹介された兵庫県立リハビリ中央病院に転院。この病院の機能回復への取り組みの力強さは、高知ハビリテリングセンターの上田真弓センター長の著書にも詳しいが、楠瀬さんにも、この転院は大きな転機になったという。「普通」に歩き、生活していたそれまでの自分を知らない人々のなかで、善意の慰めもなく、ただ淡々と、リハビリテーションを繰り返す日々。当時はそれで癒やされた。

負けん気が強い楠瀬さん、肉体の回復につれて生来の負けん気を思い出し、車イスを使う新たな暮らし方への模索を始めることになる。その努力の過程はスペースの都合で、割愛。

勇気を振り絞ってでも外へ、外へ

車イスを使うようになって「したいと思いつくことは、できるだけ実行に移す」よう意識した。

伊勢神宮参拝は長い砂利道のことも

考えず、とりあえず出発し、砂利道制覇に挑戦。お参りの際の石段はその場で助け舟を出してくれる人に逢えて、お賽銭を出してお参りもできた。通い慣れた歩道に、ある日突然電柱が立ち、車イス通過に往生し、それでも通い続けていると、工事が行なわれ、電柱をよけて通れる道がついた。この20年の毎日、こんな例を挙げればキリがない。

車イスを使う人間が、その場にいる、あるいは何事かを実行に移すことによって、使いやすさが拡がり、弱者あるいは高齢者にも過ごしやすい社会に変わっていく。そんな実感があるという。だから、億劫^{おっくう}がらず、時には勇気を振り絞ってでもできるだけ外に出たいし、声にも出したいと考えているという。

辿り着き方を見つける楽しさ

そんな暮らしの連続が、近森会への就職にも繋がった。勤怠システムの立ち上げ時期にちょうど就職でき、しかも、10年近く務めた前職のソフトウェア開発の経験がいま活かしている。独りよがりの満足ではなく、使いやすいシステムになったと周りの皆さんに思っていただけなのが当面の目標である。自分が納得できるものでないと公表できないし、ゴールは一緒でも、辿り着き方の効率の良さや、遣い勝手が問題で、自分なりにその辿り着き方を見つける楽しさもあるという。

車イスを使うからこそ分かること

楽しさといえば、障がい者スポーツで、療養中に気晴らしになればと勧められ、軽い気持ちで始め、結局バドミントンでは、マレーシアや台湾、フランスまでも遠征する経験もできた。

その他、車イス生活になったことで、「思いがけない経験がいっぱいできた。車イスになって良かったとまではいえ



▲このおかげで「腕っぷしは随分強くなりました！」。気候が良ければ鏡川堤防へサイクリング、翌日休みの日は自転車通勤実施中

▼総務課での仕事中の楠瀬さん



ないけれど、車イスを使う人間だからこそ分かること、できることを今後ともいっぱい考えていきたい！」と思う。

交通事故に遭わず、車イスを使う生活にもなっていないければ、土佐市にある実家の長男として農家を継ぐ筈だった。いま、嫁いでいる姉二人にも親にも、日常生活であまり手は出されないが、心配をかけている。必要に迫られ随分「家庭的になってしまった(笑)」楠瀬さん。この堅実で緻密なパワーは、システムの構築に極めて具体的な威力を、今後とも発揮するに違いない。

